

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：32103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23062

研究課題名（和文）主観的解釈を生み出す英語知覚表現の用法に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Subjective Construal of English Perception Verb Constructions

研究代表者

板垣 浩正（ITAGAKI, Hiromasa）

常磐大学・総合政策学部・助教

研究者番号：30845251

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：英語の知覚構文で解釈される「文に現れない知覚経験者」の存在について分析を試みたところ、味覚モダリティを表す知覚表現では総称的な存在の解釈が好まれるなど、当該構文が表す各知覚モダリティに応じて、解釈に差異が見られることが分かった。加えて、日本語と比較対照した結果、英語の知覚表現は知覚対象が有する属性・状態への評価に重点が置かれる一方で、日本語は話者の実際の体験や得られた感覚に依存した知覚的な特徴を描く傾向にあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

知覚表現における明示されない主体の解釈が多様であると示した本研究は、日英語それぞれ個別言語の記述的貢献を与えている。さらに、認知言語学では、話者の役割を積極的に取り込む「主体性」を推し進めているが、本研究は、この「主体性」が必ずしも一律の解釈を生み出しているわけではないことを示唆している。

研究成果の概要（英文）：This project has shown that the implicit experiencer in English perceptual constructions is interpreted differently depending on each perceptual modality, such as the implicit experiencer in expressions for gustatory modality tends to be interpreted as generic. In addition, it has explicated that English perceptual expressions focus on the evaluation of the property of the percept, while Japanese perceptual expressions tend to depict features of the percept that depend on the speaker's experience.

研究分野：認知言語学

キーワード：認知言語学 主体性 構文 連結的知覚動詞構文 ガスル型 ラシテイル型 知覚モダリティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

次の例文(1)–(2)は、能動文でありながらも、受動文のように目的語に生じると思われるような語句が主語に現れている知覚表現である。これらは連結的知覚動詞構文と呼ばれている(以下、CPV 構文)。

- (1) John looks happy. (ジョンが幸せそうにみえる。)
- (2) This soup tasted funny. (このスープは不思議な味がする。)
- (3) John looks happy to {me / everyone}.({私 / みんな}には、ジョンが幸せにみえる。)

CPV 構文では、知覚経験者を(3)のように to 句によって示されるのだが、前置詞句によって知覚経験者を補わなくとも(すなわち、to 句を用いていない(1)や(2)のような表現でも)その存在が理解される。このような「文に現れない知覚経験者」は、言語が表面上には現れない事態をも取り込んで解釈される動的な存在であることを示唆しており、身体的な経験や認知能力の関連で言語現象の本質を探究する認知言語学的アプローチが得意とする問題である。

しかし、これまでの研究では、この「文に現れない知覚経験者」という存在の記述や原理が明らかになっていなかった。事実、「話者(speaker)」と説明する先行研究もあれば、「総称的存在(Generic)」とするものもあり、その存在を十分に検討することなく不統一な見解が出されていた。加えて、話者の役割を積極的に取り込む主体性という視点を言語分析に盛り込む認知言語学的研究においても、理論より予測される振舞いには合致しない言語事実も存在するため、この点について部分的修正の余地があった。

そこで、CPV 構文における「文に現れない知覚経験者」とは具体的にどのような存在が解釈されているのか、そしてこの解釈を生み出す際に基盤となるメカニズムはなにかという問いを立てることにした。

2. 研究の目的

上記「1. 研究開始当初の背景」で述べた問いのもと、CPV 構文で解釈される「文に現れない知覚経験者」の存在とその役割を明確化させ、その存在の解釈を動機づける人間の認知的メカニズムを解明することを本研究の目的とした。

この目的は、動詞や構文の意味構造や前後の文脈をふまえながら、言葉に現れないが想定される意味を正確に記述すること、さらにその動機付けを検討して、人間の認知的な機能がどれほど言語に反映されているのかという言語と認知の結びつきを明らかにしようとする試みであり、この研究を通じて、言語の記述的側面と言語理論の両側面への貢献が与えられると考えた。

3. 研究の方法

これまでの CPV 構文のアプローチには、生成文法を中心とする抽象的な移動概念を用いた分析や、CPV 構文の成立背景を探る研究などが見られる。しかし、いずれも理想化された CPV 構文の分析しか扱っておらず、事例として観察される CPV 構文の用法を詳細に記述してこなかった。

そこで、まず当該表現の事例を BNC や COCA, NOW Corpus などの英語コーパス等を用いて幅広く収集したうえで、前後の文脈を踏まえながら分析と考察を行った。とくに事例に基づいた「文に現れない知覚経験者」の分析を重視し、その分布の解明を目標に置いた。

これに加えて、日本語を中心に当該表現に対応する構文との対照的な研究を行い、各言語に対する「文に現れない知覚経験者」の関わり方の違いを考察した。具体的には、日本語の「- ガスル」型の知覚表現と対照させて、「知覚経験者の明示化」・「同時性」・「瞬間的感知」・「持続性」といった観点から文法的特徴を抽出した。

4. 研究成果

知覚表現が表す各知覚モダリティに応じて、解釈に傾向が見られることが分かった。例えば、味覚モダリティを表す CPV 構文(例. This cake tastes good.)では総称的な存在の解釈が好まれていることが明らかになった。この傾向はいわゆる中間構文(例. This car drives smoothly.)で指摘されている非明示項と類似する振舞いである。さらに興味深いのは、CPV 構文として成立するまでの過程を観察してみると、各動詞固有の意味変化を経たことが分かり、taste は中間構文を介して CPV 構文に至った可能性を指摘した。これらの考察を通じて、中間構文と味覚を描く CPV 構文との接点を確認された。

また、日本語と比較することで英語の知覚表現における意味的特徴を明らかにするだけでなく、知覚現象の捉え方に対する言語学的差異に言及した。まず本研究でも注目している知覚経験者の明示化に違いが見られた。例えば、次のように英語は「嗅いでいる人物」を明示させた事例

が観察される一方で、日本語にはそのような表現が難しい。

- (4) The flower smells foreign to him.
- (5) ? このワインは彼には変な匂いがする。

さらに英語表現は、知覚対象の在り方に焦点が当てられる傾向が強く、対象物が有する属性・状態が持続する事態を描くことが可能である。一方で、日本語に対応する表現では、当該状況をこの構文で表すことができない。むしろ、瞬間的異変を感知する状況が描けるなど、知覚経験者が実際に体験した感覚そのものを描くことを好む。

- (6) The product continues to smell fresh.
- (7) ? この犬は変な匂いがし続けた。
- (8) あれ、今一瞬変な味がした！

これらの結果から、英語の知覚表現は知覚対象が有する属性・状態への評価に重点が置かれる一方で、日本語は話者の実際の体験や得られた感覚に依存した知覚的な特徴を描く傾向にあることが分かった。この対照は、定延(2002)の提唱する「体験と知識」の連続体の中で捉えることも可能である。定延(2002)によると、言語情報は共有可能性の程度に応じて、体験と知識に連続的に二分できるとされ、「体験」とは、自己が占有するだけで他者が共有できない個人的な言語情報に対して、「知識」とは、誰にでも共有され得る公共の言語情報であるとされる。この連続性の中で、英語の知覚表現は知識表現的に描く傾向にある一方で、日本語はより体験表現の位置につく。この結果より、先述した「文に現れない知覚経験者」に総称的な存在を求める傾向にあるモダリティを描いた英語表現は、当該構文が知識表現的な立ち位置であることに由来する可能性が窺える。さらに、本研究の主張は、知覚というある種普遍的かつ主体的と思われる事態を描く表現であっても、知覚構文という各言語・各構文に独立して備わった文法的特徴が存在していることを示唆している。

知覚表現における明示されない主体の解釈が多様であると示した本研究は、日英語それぞれ個別言語の記述的貢献を与えている。さらに、認知言語学では、話者の役割を積極的に取り込む「主体性」を推し進めているが、本研究は、この「主体性」が必ずしも一律の解釈を生み出しているわけではないことを示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 板垣 浩正	4. 巻 20
2. 論文標題 英語中間構文の「非典型的」典型例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本認知言語学会全国大会論文集	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Itagaki Hiromasa、板垣 浩正、イタガキ ヒロマサ	4. 巻 2020
2. 論文標題 On the Extension of Copulative Perception Verb Constructions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 61～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/84984	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Itagaki Hiromasa、イタガキ ヒロマサ	4. 巻 2019
2. 論文標題 Revisiting Constructional Changes in Uni-directional Copulative Perception Verb Constructions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 61～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/76981	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 板垣 浩正	4. 巻 -
2. 論文標題 フレーム意味観から捉える英語中間構文の非明示項	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばから心へ 認知の深淵	6. 最初と最後の頁 267-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 板垣 浩正	4. 巻 42
2. 論文標題 日英語の味覚・嗅覚表現について 属性評価と体験的記述	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弓削商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 板垣 浩正
2. 発表標題 知覚表現としてのガスル構文とラシテイル構文
3. 学会等名 関西言語学会第46回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 板垣 浩正
2. 発表標題 英語中間構文の「非典型的」典型例
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 板垣 浩正
2. 発表標題 明示されない知覚経験者を含む知覚構文に関する日英語対照研究
3. 学会等名 産学連携フォーラム2019講演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 板垣 浩正
2. 発表標題 連結的知覚動詞構文の独自性と構文拡張
3. 学会等名 大阪認知言語学研究会 2月定例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------